

---

# エネミー オブ スクール

魔-1024

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エネミー オブ スクール

### 【Nコード】

N8571L

### 【作者名】

魔 - 1024

### 【あらすじ】

国家の影響を受けない「学生の学生による学生の為の都市」、それが「Global School City」じんのやまと 通称『学園都市』。日本で普通の学生生活を送っていた神野大和は両親が事故に遭って亡くなってしまい、学校に通い続ける事が困難になってしまった。そこで、大和は学園都市への編入を決意する。しかし、学園都市は良い意味でも、悪い意味でも大和の想像を超えた異質な空間だった……。現代SF的バトルアクション 予定！

## e p : 0 1   p r o l o g u e ( 前 書 き )

科学に疎かたりしますが、愛と気合で頑張って書いていこうと思います。

## ep:01 prologue

ピピピッ！ピピピッ！ピピッ……

喧しく鳴り響く目覚まし時計を止め、俺は重い瞼まぶたを開ける。

カーテンの隙間から眩い朝日が差し込み、窓の外では鳥が囀さえずっている。完璧な朝だ。

「……はあ、もう朝か」

まだ大部分が寝ているかのような重い体をベッドに起こす。  
朝パツチリと目が覚める人が心底羨ましい、自分はどうかやってできない。前日にいくら早くに寝ようがスムーズに起きた事など一度も無い。

「……支度するか」

まだ半覚醒状態の自分の身体を無理やり立たせ、台所へと向かう。  
昨晚の夕飯の残りがあったので、それで適当に朝食を済ませ、それから軽くシャワーを浴びる。浴室から出ると、準備してあった制服を身につけ、身支度を整え始めた。

「おし、良いかな」

鏡を見ながら自分の格好をチェックする。

若干寝癖が残っている感じはするが……これはワックスを付けた  
という言い訳が通用するレベルだから良しとしよう。時間もそろそろヤバイ。

急いで玄関に行き、学校指定靴を履いて外へ出る。

「……行つてきますよつと」

最後に誰もいない部屋へと挨拶を残し、俺は寮を後にした。

寮を出て駅へと向かう。

だんだん駅へと近づくにつれて、学生の姿が目につくようになってくる。

いや、目に付くと言うか視界に映っているのは全部学生だ。少し異様なこの光景。普通はサラリーマンとか学生以外の人間も多いはずなのだが、しかしココでは当たり前前の光景でもある。

駅に到着し、ホームで電車が来るまでの間少し待つ。ホームにいるのも恐らく99%は学生だ。

しばらくすると、ピンポンパンポン、という小気味良いリズムと共にアナウンスが流れ始めた。

『まもなく3番線に、直通・中央学業区行きがまいります、危ないですから黄色い線の内側までお下がりください。この列車は4つドア10両です』

アナウンスが終わると、少し間を空けて電車がやって来た。スムーズに電車に乗り込んで、しばらく人の波の間で揉まれるという苦行に耐える。

毎日経験してもこれは疲れる、ただ人がたくさんいる空間に立っているというだけで、持久走を何百メートルも走ったかのような疲労感が溜まっている気がする。

いよいよ勘弁してくれ、というタイミングで。

『まもなく～学業区中央～、お出口は両側～』

鼻を摘んでいるように聞こえる車掌声が放送で流れ、まもなく電車は目的地である駅へと着いた。

電車に乗っていた学生が一斉に降車し、それぞれの目的地へと向かう。

俺は『高等学部』と書かれている出口を目指し歩き出す。

少し歩くと、『高等学部行き』と書かれた移動用のとてつもなく長いエスカレータがあり、俺はそれに乗る。

周りには俺と同じ年頃の学生達が携帯をいじったり、友達と雑談したりしながら、同じようにエスカレータに運ばれていた。

しばらくしてようやく終わりが見え、俺は駅の外へと出た。

すると、直ぐ目の前にはただっ広いロビーがあり、生徒が雑談したり、忙しく動いている。

そう、ここは既に校舎の中なのだ。

駅を出たら校舎の中だなんて、最初に体験した時は驚きのあまり何も言えなかった。こんな、学生の為だけに考えられたような構造をしている駅や校舎なんて見たことも無かったからだ。

しかし、ココでは当たり前だったりする。

そう……「ココ」は『3rd Global School City:Shinano』 通称、学園都市シナノと呼ばれる、

学生の学生による学生のための都市なのだ。

## e p : 0 1 p r o l o g u e (後書き)

更新はのんびりしていることと思っています。 気長にお付き合い頂けると幸いです。

学園都市というのは、一昔前に第三次世界大戦が起きた際、世界各国の教育機関や児童保護団体、及びそれに賛同する者たちが国境を越えて協力し合い「世界教育連合」を設立し、そこから発案された計画であり。国の影響を受けず、人種や貧富の差も関係なく誰でも平等に、かつ安全に教育を受けられる場所を作ろう、という目標を目指して始まったらしい。

そんな夢みたいなお話が実現できるわけが無い、と当初は思われていたみたいだが。世界各国の有力者やこの思想に賛同する国家が支援を始め、規模が大きくなり、さらに長きに渡る戦争で力を持った国々が疲弊していた事も重なって、無事ヨーロッパに最初の学園都市『オストラヴァ』が完成するに至った。

それから第二の学園都市『ボーンホルン』、第三の学園都市『シナノ』が完成して、今に至る。

このシナノは日本の中にある学園都市だが、日本国家の影響を受けず完全に独立しており、この都市内独自の規則に従って成り立っている。

基本的に学園の運営は全て生徒が行い、生徒の自主性を存分に発揮する事が出来る。

……と、以上が俺      こと神野 しんのやまと 大和がこの学園都市に編入する際に、学校案内をしてくれた教員が教えてくれた事だ。

都市について把握してるのはこの教えてもらった事くらいで、これ以上のことはまだ良くは知らない。

というのも、俺は中学まではこの学園の外……つまり日本の普通の学校に通っていた。

しかし、両親が事故で急死し、親戚もいなかった俺は通学を続ける事が困難になってしまった。



そこへ学園都市から編入の案内状が届き、俺みたいに家庭的・経済的に通学が困難な生徒に対して、生活する場所の提供や、資金的援助を受けながら学校に通えるシステムがあることを知った。

学園都市への編入　というのは、言わば日本から移り住むとも言える訳で、俺は結構悩んだが、結局このまま日本で苦勞するよりは、ある程度知識を身につけて社会で生きられるようになるうと思いい、編入を決意した。

幸いにも、俺は学力、運動能力などは比較的優れている部類だったので、編入は滞りなく進んだ。

現在は編入して1ヶ月が経ち、ようやく少しはこの学園に慣れてきた……と言った所だ。

「でも、改めて見るとすげえよな、これ」

と、広大なロビーを見回して呟く。

清掃の行き届いた清潔な床や壁、そこを行き交う何百という生徒達、数分毎に到着する通学電車……とにかくスケールがでかい。

学園都市と呼ばれるだけあって、学業を営むには十分過ぎるほどの設備が整っている。

俺が考えを巡らせながら周囲を眺めているとそこへ。

「お、大和じゃん！おはようさん」

と、元気の良い声が掛かってくる。

「ん？ああ、五十嵐か、おはよう」

掛けられた声で誰か判別出来た俺は、そいつの方を向きながら挨拶を返した。

「どうした？朝からボーっとしやがって。そんなんじゃ授業中寝ちまうぞ」

「普段から寝てるお前に言われたくねえよ」

と皮肉交じりに言葉を返しつつ、俺は声の主を見る。

そこに立っていたのは、オレンジ色に染めた髪をワックスか何かでツンツンに立て、やたら派手な格好をした一人の男子生徒がいた。こいつの名前は五十嵐<sup>いがらし</sup>まさかど<sup>まさかど</sup>将門、見た目の通り不良……と言いたいところだが、性格は素直かつ曲がった事が嫌いなタイプだったりするので、いまいち不良らしく無い。

俺と初めて会ったときも、全く人見知りせず気さくに話しかけてきて、なんだかんだで話しているうちにすっかり仲良くなってしまった。

「俺はいざと言う時の為に力を溜めてんだよ。もし訳分かんねえ化け物が急に襲ってきた時に皆勉強し過ぎてダウンしてたらやべえじやねえか」

ちなみにコイツはアホである。

それに、考えるより先に行動するタイプだ、悪い意味で。

「化け物なんて襲って来ねえし、勉強のし過ぎでダウンなんてありえねえし、そもそもお前だけ起きててもどうしようもねえし、って何真面目にツツコンでるんだ俺は……」

「あんだと！？俺様が起きてれば化け物の一匹や二匹ちよちよいのちよいだぜ！」

「一体どこからそんな自身が……」

と、俺は途中で言葉を止める。言い合いしていて虚しくなってきた。

付き合うだけ時間の無駄だと、俺は教室に向けて歩き出す。

五十嵐も慌てて追いかけてきた。

丁度良く降りてきたエレベータに乗り、自分の教室がある階のボタンを押す。ちなみに16階だ、ここも規模がでかい。

「なあ、大和」

「なんだ？」

教室行きのエレベータに乗り、扉が閉まると五十嵐が呼びかけてくる。

「お前選択の科は何にするんだ？」

「選択科か……」

この学校では1年の半ばに自分で教科を選択して、以後のカリキュラムを組むというシステムがある。

選択できる教科は膨大で、商業、工業、専門職、何でもありだ。

しかし、膨大すぎるが故にその中から選び抜くというのも大変で、なかなか決まらない生徒も多いらしい。

かという俺もその一人なのだが。

「俺はまだ決まってない。こっち来る事になって色々バタバタしてたからな、将来なりたいものなんて考えてる暇無かったよ」

「なんだ、大和も決まってねえのか。じゃあちよつと安心したぜ」

どこかホッとしたように五十嵐が息をつく。  
いや、安心されても困るんだが……。

「まあ、でも将来になりたいものなんて急いで決めるような物じゃないしな、しっかり悩んで決めた方が良くないんじゃないか？　まだ時間が無い訳じゃないし」

「やっぱそうだよな！　よし、俺様に合うビッグな職業見つけるまでじっくり考えるところでせー！」

グツと拳を握り締め、五十嵐が納得する。

一緒に乗っていた生徒が何事かとこっちを見てきた。恥ずかしい。ビッグな職業というのはよく分からないが、とりあえず悩みが消えたみたいなので良かったのだろう。

「お、着いたな。じゃあまたな大和！」

14階に着いた所で、五十嵐がエレベータを降りる。

五十嵐の教室は俺の教室より2階下のこの階だ。生徒数が多いため、教室も途方も無く多い。

「おう、またな」

そう挨拶を交わし、エレベータの扉が閉まる。

時を空けずして、俺の教室がある16階へとエレベータは到着した。

エレベータを降り、教室へと向かう。

しばらく歩くと、ナンバープレートに「1605」と書かれた教室があった。

そう、  
「ここが俺の教室である」  
シナノ学園高等学部一年第三十五  
組だ。

教室のドアをくぐり中に入る。

俺の姿を確認した数人の生徒が「おはよう」声を掛けてくる。

俺もマナー程度に適当に挨拶を返して、自分の席に着いた。

俺が席に着いた後で、一部の奴らがヒソヒソと何か小声で話し合っている。こっちに聞こえ無い様に喋っているつもりなのだろうが、残念ながら丸聞こえだ。

耳に入ってくる話をまとめると、どうやら俺は近寄り難しいイメージがあるらしい。こちらとそんなつもりは毛頭無いのだが、まあ高校からの編入で見知った顔は一人もないし、余り自分から喋りかけたり騒いだりしないのでそう思われるのも無理は無い。……五十嵐とつるんでいるのも原因なのかもしれないが。

(……ま、どうでもいいさ)

俺はそう思い、その話題から興味を無くす。

人にどう思われようがあまり気にしないし、別に友達が欲しいとも思わない。

以前はこんな風に思ったことなど無かったのだが、どうやら両親が事故死してからというものの、俺の中からある種の感情が消えてしまったらしく、以前と性格が変わったのかもしれない。

周りの声を気にせず授業の準備をしていると。今度はヒソヒソという声では無く、クスクスという忍び笑いが聞こえてきた。

(いい加減うるせえな、なんか言いたい事あんなら言っ来ていっつの)

そう思ってさっきの連中を振り返った。

しかし、そいつらが見ていたのは俺ではなく、少し離れた席に座っている女の子だった。

(……………チツ、また海音寺苛めか)

俺は自分が噂されるよりも気分が悪くなった。

連中が標的にしている女の子は、少し青みがかった髪を長めのボブカットにし、眼鏡を掛けている小柄な女の子で、名前を海音寺かいおんじ紫苑しおんといった。

彼女はいわゆる苛めに遭っており、クラスの大半から無視、一部の生徒からは陰湿な苛めにあっていると聞いた。

なぜそんなことになったのか理由は分からないが、話によると俺が編入する前　つまり中等学部の頃から既に苛められているらしい。

そんな事を思い出している内にも、連中はわざと海音寺に聞こえる程度の声で悪口を言い合い、「ぎゃははは！」と下品に笑っている。

対する海音寺は、まるでそんな事が聞こえていないかのように平然と本を読んでいた。

こんなやり取りを今まで何度も繰り返してきたのだろうかと思うと腹が立つ。苛めをしている連中ももちろんだが、一切何もしない海音寺にもだ。

(……………って、俺が怒った所でしょうがねえよな。何が原因なのかも知らねえし、海音寺自身も意に介してないようだしな)

とりあえず気持ちを落ち着けて、この件の事は考えないようにする。

(まったく、自分の陰口叩かれても何も感じねえのに、人が苛められ

てるのを見ると胸糞悪くなるなんてどうかしてるな、まったく……)

モヤモヤしながら授業の準備を済まし終わったところで授業開始のベルが鳴る。

生徒達が慌しく自分の席へと戻り、まもなく教材を抱えた教師が教室へと入ってきた。

「起立、礼、着席！」

教師が教卓に着いた所で、日直が号令を掛ける。こういう所は以前の学校と同じだ。

「はい、おはようございます。では、今日はこの学園都市に配備されている銃器の構造や取り扱い方についての授業を行いましょう」

と、教師が笑顔で言い、電子ボードに銃器の設計図を表示し、レーザーポインタで構造の説明を始めた。

そうすると、生徒各自の席に配置されているモニタに細かな説明が表示され、生徒達はそれを自分の携帯型端末にメモしていく。

……………こついう所は以前の学校ではありえないな、絶対に。



ep:01 kaionzi (後書き)

ちよつと終わりが後味悪いと感ずるかも。すいません。

「であるからして、銃器は自分を守る手段であると共に、人を殺める力を持つということを十分に刻みましよう。当たり前前の事です、これはとても大事な事です」

教師の講義が続く。

銃器に関する授業はこれまでに何回か受けてきたが、大体最後の方は決まって毎回同じ事を言う。

この都市では銃の扱いも授業内で学ぶ。

以前いた日本ではこんな事はある得なかったのだが、ここでは中等学部頃から、既に銃器についての扱い方や、使用に当たっての心構えと言ったものを学んでいるらしい。

まだ年端もいかない俺達のような若者に、こんな事を教えるのはどうかと思うが、情勢が情勢な為に仕方ない部分はあるのだろう。第三次世界大戦が終結し、しばらくが経った近年。大戦の影響で疲弊していた国々も徐々に力を取り返し始めており、今世界は常に緊張状態だ。いつ次の大戦が勃発してもおかしくない。さらに、この学園はその微妙なバランスの上に成り立っている。いざという時に、自分や近い者を守り得る手段は身に付けておくべき、という考え方は理解できなくもない。

「では、午前の講義はここまでです。そして、午後は皆さんにとっては初めての射撃訓練があります。十分注意して訓練に望むようにしてください。お昼休みが終わったら第二演習場へ集合です」

そう言い残すと教師は教材をまとめて教室を出て行く。

教室の扉が閉まると、生徒達も先程までの様子とは打って変わり、

興奮した様子で会話に花を咲かせ始めた。

「射撃訓練か……」

俺は騒々しい雰囲気の中、一人呟く。

そう、今日は銃器を使用した実施訓練があるのだ。

他の生徒は中部部から銃器については学んでいるらしいが、実物を使用した訓練は今回が皆初めての体験らしい。

そんな訳で、皆がワイワイ騒ぐのは無理もないのかもしれないが、俺は落ち着かなかった。

銃についての話を聞くのと、実際に撃てと言われるのでは、やはり何と言うか……「重み」が違う。

(……ある程度覚悟はしてたんだがな)

俺も入学する際に、何も知らずに入った訳ではない。事前にいくらか説明は受けたし、学園都市に入るという事は、以前までとはルールやシステムが異なる世界に足を踏み入れる事……と理解していたつもりだ。

だが、実際こういう場面に出くわすと頭は理解していながらも、心が順応していないというのが嫌でも思い知らされる。

(そっぴゃ、五十嵐の奴はもう射撃訓練終わったんだっけ。どんなんだったか話でも聞いてみるか)

クラス毎の訓練の為、クラスによって実施する日時は違う。

自分のクラスは、今日の午前中がそうだと今朝五十嵐が言っていた。ならばもう実習が終わって帰ってきている筈だ。

そう思い立つと、俺は五十嵐に会う為という珍しい理由で、教室を後にした。

「いやー、大和から食事のお誘いとはな。珍しい事もあんだな」

五十嵐が嬉しそうにしながら、学食のうどんを啜る。

「まあな、ちょっと聞きたいこともあったし」

五十嵐の教室に行くと、お目当ての本人は机に突っ伏して爆睡中であつた。

しかし、そこへ俺が近づき「飯を奢る」と一言声を掛けると、まるで魔法のようにパツチリと目が覚め、勇み足で学食まで着いてきた。現金な……もとい食い意地の張つた奴だ。

「うん？ 大和が俺に聞きたいこと？ 自慢じゃねえが国語数学理科社会英語は全く分からんぜ」

「お前にそんな事聞こうなんて奴いるわけねえだろが」

ちなみに、こいつと俺との成績の差は、天と地の差と言っても大げさではない。

しかし、別段俺がこの学園内で優秀という訳ではない、こいつがあまりにも酷すぎるのだ。よく進級し続けているものだと感心してしまう。

「んじやなんだよ。ああ、バイクの事なら結構詳しいぜ、カッティングしてやるうか？」

「いや、いい。ってかバイク持ってねえしな」

埒が明かないと思い本題を切り出す。

「なあ、お前午前中に射撃訓練あったら？　それがどんなもんだっただけだと思ってさ」

「射撃訓練？　おう、やったぞ。どんなもんで言われても、普通に的に向かって銃撃ってたただけだぜ？」

さも当たり前のように五十嵐が答える。

特に違和感を感じている様子は無い。やはりこの思いというか感覚は、少し前まで学園の外にいた自分ならではの感覚なのだろうか。

「お前も初めての訓練だったんだろ、何か感じた事とか無かったのか？」

「ん、別にないぜ。なんでそんな事聞くんだ？」

「……………いや、俺がこの学園に来てまだ日が浅いから感じてるのかも知れないけど、何か銃を撃つ事に抵抗があるというか、違和感があるというか……………」

上手く説明できない。

何なのだろうか、この思いは。

人を殺せる技術を身につけてしまうのが恐ろしいのだろうか。

……………それとも、もっと他の何かが……………。

そんな事を思い色々な感情が混ざってごちゃごちゃとしてしまう。

「……………なあ、大和。お前難しく考えてねえか？」

「え？」

答えが出せずにモヤモヤしていると、不意に五十嵐が声を掛けてくる。

「例えばだ、ここが戦場で大和が負傷してその辺に転がっているでしょう。するとそこへ大和を倒しに敵が近づいてくる。もちろん前は応戦なんてできない。そして近くにいる俺の手には銃がある。もしこんな場合だったら俺は迷わず引き金を引くぜ」

真っ直ぐな瞳で五十嵐が言う。

その瞳からは実際にその状況になったとしても本当にそうするであろうと思わせる意思の強さが感じられた。

「……その結果、お前は人を殺してしまうかもしれないんだぞ？」

「でも、それで大和は助かるだろ。だったら俺は後悔もしない。むしろ撃つのを躊躇って、そのせいでお前が死んじまったら、その方がよっぽど後悔するだろうぜ」

五十嵐は言葉を続ける。

「つまりだな、ようは自分の中でしっかり目的を持ってるって事だよ。極端な事言つと、銃を撃つ事なんざ誰だってできる。大事な何を思っ、何の為に撃つのかって常に考えてる事だと思うぜ。それで例え人を殺しちゃったとしても、心で思うところはあるだろうが、ただ罪悪感だけを感じるって事は無いと思うぜ。ま、それが良いとは絶対に言えんがな」

一通り喋り終わると、五十嵐は再び、ズズツとうどんを啜る。

そんな様子を眺めながら、しばらく俺は五十嵐の言った言葉の意味を考える。

使うことは誰でも出来る、何を思って使うか……か。

「……………なるほどな、何となくだけど分かったような気がしたよ」

まだ全部が納得できたわけではない、が少なくとも先程より迷いは薄らいでいる。

何の為に銃を使う事になるのか分からない。だがもし、何か力が必要になる事が起った時に、何も出来ないでいるよりかは、その状況を打破しうる手段を身に着けていた方が良い。

と、今はそう思うことにした。

「お前の方がよっぽど割り切ってたんだな。まさかお前にここまで正論言われるなんて思って無かったよ」

「ああ、俺様は根が単純だからな……………って誰が単細胞だ！！こらあ！！」

「何自分で言っただけで自分でキレてんだよ……………」

勝手に怒り出した五十嵐を尻目に、俺は全く手を付けずにいたため伸びてしまったうどんを齧る。

こうしてこの後の食事はいつも通りの空気となった。

「お前はこれから射撃訓練か？」

「ああ」

食事も終わり、学食を出てエレベータホールへと向かう。

普段どおりの授業を受けるなら問題ない時間だが、今日は第二演習場まで行かなければならないので、少し余裕が無い。

「ま、怪我はすんなよ。今後こいつた戦闘訓練が増えるからな、出れなくなったら単位ヤバイぜ」

「分かってるよ。てか、俺の単位の心配する前に自分の単位心配しろよな」

うげ、と五十嵐が苦虫を噛み潰したような顔になる。実際ヤバいのだろう。

「じゃ、俺行くわ」

エレベータホールに着くと、五十嵐が上行きのエレベータのボタンを押す。

学食は校舎の2階にある為、五十嵐は午後の講義を受けるために上行きのエレベータに乗る。俺はこのまま電車に乗って第二演習場だ。

「おう、んじゃな」

五十嵐と軽く手を振って別れる。

あいつはただのアホかと思っていたが、こういう事に関しては俺よりもよほどしっかりしていた。

（今日はあいつに感謝だな）



そんな事を思いつつ俺は電車に乗る。

周囲には同じクラスの生徒が何人も乗っていた。同じく演習場に行くためだろう。そのまま数分待った後。

『演習場行き発射致します』

アナウンスが流れ、ドアが閉まる。

そして、電車は第二演習場へと向けて動き始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8571/>

---

エネミー オブ スクール

2010年10月8日22時28分発行